

が一杯つくられたんですけれども、あれで都市は凄く通りが死んでしまったんですよね。

だから、一番起こってはいけないのは、こういうことに過剰反応して、奥田先生がおっしゃるように、ハードで何とか対応しようと思うとそういうことになって、かえって都市を悪くしてしまうということが起こりやすいので、本当はそういうのに警鐘を鳴らすというのにも必要なだと思いますけれども。

吉川 さっきの話の延長で一つだけ付け加えたかったのは、大勢の人が死ぬという意味では、日本で今、自殺者というのは結構凄い数ですよ。交通事故が1万人で、自殺が3万から3万5,000人。特に若者よりも中高年の方が、特に50歳前後が一番不安で、しかも男ですよ。それが死んでしまうというのは、これは本人の問題なのか、都市の問題なのか、経済の問題なのか、色々な要素があるんでしょうが、例えば、仮に自分に当てはめてみると、会社を首になっても、どこか田舎へ行って、自分の実家でも行って、多少土地でもあれば、そこで野良仕事をやって、自給自足をやって、それで生活しながら、あとは余った時間で少し本でも読むとか、そういう生活の仕方だってあるのに、どうも僕らの世代というのは、正しく20世紀型で、会社に貢献して、会社を通じてしか社会貢献できないように、また、所得もある程度ないと、これで周りの付き合いやら家庭が支えられない。それに凝り固まっているから、そういう都市から離れて、別のものやってみようということができない。そういう意識の人達が正しく20世紀から別の価値観に転換できなくて、結局、自分でやり場がなくて死んでしまう。そういう問題というのは非常に大きな問題だろうと思っていて、また、自分の世代がそういうのが多いから…。

谷 「クローズアップ現代」でやっていましたね、自殺された家族の話を。

吉川 大変な問題ですよ、残された方が。男は随分勝手なことをやっているなど言うか… (笑い)。

谷 もう一つ問題は、生命保険なんです。だから、最後に生命保険を家族に残してやろうと、そういうので自殺している人は結構いるんですよ。生命保険なんて入らない方がいいですよ。

東郷 自殺はいいんですって。

谷 何年か経っていればいいんですよ、確か。

恒松 そう、年数によるんです。

伊藤 生命保険は自殺じゃ出ないというふうに変えてしまえば、大分自殺は減ると思いますよ。

恒松 そうでしょうかね。

谷 多分、減ると思いますよ。

伊藤 中小企業の社長さんで大体自殺するのは、後の負債を何とか自分の生命保険でとか、そういうのが多いですね。本当に最後の手段で、死をもってお金を返せるのであればと。

恒松 今、吉川さんが言われたようなことは、確かに戦後も、1960年代位まではまだ、あの頃の不況時代に…。

大体人口移動を見ても、不況になると、必ず農村人口が増えて都市が減るんですよ。最近になって、全然それが逆になったんです。やっぱり受け入れ側の方にも問題があるような気がするんですよ。それを何とかしたいというのを、今我々も色々勉強しているんですけどね、農業サイドと都市サイドで。

例えば、今朝の新聞でしたか、上越市は今、住宅団地をつくりまして、それに一定の規模の農園をつくっている。みんな農業をやって楽しむとか、そういうことをやっているんですよ。上越市の市長はちょっと変わっていますからね。あれが本当なのかどうか知りませんが、若干ちょっと変わった人で、そういうことをやっている所もあるんです。だから、農業とどううまく仲良くできるかという問題だろうと思いますけどね。昔、戦前は明らかに不況になると全部農村へ帰ったんですよ。昭和の恐慌時代というのは正にそうですけど、それができなくなったというのは、都市の生活が快適になったんでしょうかね。快適とも思わないですけど。だから農村は嫌だと。自分の生まれ故郷であっても嫌だと。

私なんかもそうですね。私も農村で生まれて育ったんですけど、今、東京に住むのが嫌になったから、それじゃあ農村へ帰ろうかと言うと、そんな気にならないですよ。それは人間の結び付きが、都市もそうだけれども、農村も非常に希薄になってきているわけですよ。そうすると、あんな所へ帰ってきて、俺はどうしたらいいんだろうと思うと、帰る気にならない。

吉川 それで自殺しちゃうんですかね。

恒松 いやあ、自殺までは… (笑い)。自殺しようとは思わないけれども、とにかく帰る気にはならないという状態ですね。

谷 都市とつかず離れずの所で、晴耕雨読にみたいな生活だったらできるんじゃないですか。

恒松 できるかも知れませんね。私はしかし自分が農村で生まれたからいいんですけども、女房なんかはとって駄目ですね。

谷 それはそうですね。うちもそうです。

恒松 東京を離れては生活できないような感じですよ。

伊藤 それは携帯電話と一緒にじゃないですかね。すぐに繋がるとか、東京にいれば、薄く生活しても、何かすぐ情報を取れるわけですよ。田舎へ行っちゃうと、自分の人生をその地域にコミットしないと駄目ですよ。選択肢もないですから。それが一番不安なんじゃないですかね。別に東京にいて何をやるというわけじゃないけれども、でも携帯ですぐに情報を取れるように、東京に入れば何かできるというところじゃないですかね。

恒松 私は農村のあり方にも非常に問題があると思うんですけどね。だから、都市という場合に、東京のように大きい所、それから小規模な所があって、よく昔から人口 20 万人位の都市が一番住みやすいんだというようなことを言っていましたけど、典型的なのが私の郷里の松江なんです。松江に住んでいる人は、非常に快適らしいですよ。言いかえれば、かなり希薄になったとはいえ、かなり人と人の関係が密接であるということ、それから、比較的静かであるとかね。松江の人達は満足して住んでいるですよ。やっぱり規模。

谷 日本は、県庁都市というのは、どこも大体快適に住める適正な規模を持っていますよね。

恒松 金沢もそう？

谷 ええ、都市的なものも一応は全部そろっていて、それから、ちょっと行けばすぐ自然があって、殆ど車社会になっていますから、昔みたいに移動が不便だとかいうことはないですね。

恒松 だから県庁所在地というのは、人口が減っている所在地ということはないですよ。小さい鳥取でも山口市でも、人口 10 万ちょっとですけども、減らないですよ。増えもしないけど減らない。

谷 大体、その県では県庁都市が一人勝ちしていますね。

恒松 そういことですね。全部県庁所在地に集まりますからね。

だから、安全な都市ということを考える場合に、人口の規模というか、都市の規模というものが、かなり一つの要因になりはしないかという感じはしているんですけどね。しかし、都市というものも、一つの実態としての都市か、あるいは行政的な単位としての都市か、今の県庁所在地なんかもそうですけれども、そういう意味で都市の規模というのがある程度関係するのかなという感じがするんですよ。

僕は、東京はごちゃごちゃしているけれども、各区が独立の行政主体の市町村になればいいと思っているんですよ。そうすると随分変わるんじゃないかな。渋谷区が渋谷市になることによって、みんないい渋谷をつくろうよというような気持ちが出てくるんじゃないかというような感じもしますけどね。そこら辺は私よく知りませんが、若干、そういう都市の規模とか…。

谷 あと少しなんですけれども、例えば、危険が起こりそうだとする時に、例えばアメリカなんかは、自分の身は自分で守れと、ピストルを持って、なかなかガンコントロールができないというのはそういうところにありますよね。日本はそういうのはないですから、どうやって守ればいいのか。勿論、危険な所へ近づかないとか、防犯ベルを持つとか、鍵を一杯かけるとか、そういう自衛はできますけれども、やっぱり究極には警察力とかそういうものが必要になってくるんですけども、本当にそれでいいんですかね。

恒松 いや、よくないんじゃないですか。

谷 どうも警察が不祥事続きで、信頼されていないですよ。そういう中で警察を頼らなければいけないというのも何か凄く不幸な状況だし。

吉川 アメリカの場合には、消防士というのは、僕が聞いた話では、プロとして給料をもらっているのは 3 割で、7 割はコミュニティの消防隊ですね。そういう方が日頃からあれだけ訓練を受けて、この間のワールドトレードセンターみたいなのに第一線の人がみんな行って、それで死んじゃっているわけですね。そういう意味では、あれだけヒーローと言われて、名誉な仕事だとみんな思われているから、セントパトリックなんかが一番先頭になってパレードをやる人達なんだけれども、やっぱりそういうコミュニティの安全を自分達で守るという意識がアメリカにはある。それは日本と違ってるところなんだけれど、でも日本だってそうしなければ、消防士と警察官に頼ればいいのかというのでは、やっぱり限度があると思うんですよ。それ自体、またさっきの話じゃないですけど、間違いを一杯やるわけですから、警察も消防もね。やっぱりそういう意味では、自分達でとか、コミュニティでというのが育ってこない、本当の安全は担

保されないと思いますね。

恒松 私が子供の時はそうですよ。町の消防なんていうのはなかったんですから。例えば、かなり大きな農家は、自分の所で消防機能を持っていましたから、それでやっていたんですけどね。

谷 それは何もかも全てそうじゃないですかね。昔はコミュニティでやっていたことを、どんどん市がやるようになったら、本当にやらなくなって、自分の玄関の前に落ちているゴミでさえ拾わないという、昔はよくお母さんとかが箒で掃いていましたよね。最近はそのようなのを見たことないですね。道路をこうやって掃いているおばさんとか。

恒松 いや、そうでもないですよ。うちのおばさんはやっていますよ（笑い）。家の前はいつでも綺麗にしていますよ。ちゃんと箒で掃いてやっていますから。

東郷 僕は子供の時に、家の前の半分から少し向こう位まで掃除をなさいと。真ん中の所は両方がやるんだというふうに大体教育された覚えがあるんです。これは学校教育じゃなくて家庭教育でしょうね。だから、僕は今でも、隣の向こうまではやらないけど、半分から半分越えた所まではやっているんですけど。

谷 去年、金沢は 38 以来の豪雪だったんですけども、みんな雪かきをしないんです。融雪装置がついたでしょう。だから、雪かきをしないのが当たり前になっていて、ついていない所もしないんですよ。そうすると、車が踏み固めちゃいますから、ツルツルツルツルになっちゃうんです。危ないんですね。

それから、融雪装置も、付ける方はお金があれば付くんですけども、動かす方は、余り汲み出すと地下水が低下してしまうので、総量規制しているんです。だから、あるけど出ない。あるいは時間が限られてしまうから、あんなにたくさん降ると、機能しなくなるんです。

奥田 さっき、掃除する時に真ん中の線とおっしゃったけれど、東京は気のきいた人というのは、真ん中の線というのは水臭いから、相手の家の前まで掃除を全部するか、あるいは全然全くしないかどっちかで、しかし、京都の場合だったら、真ん中の線から一分、つまり六分、真ん中の線から一分だけ掃除するのが相手にも負担をかけないし、という六分のロジックというのがあって、僕は父親が京都だから、でも東京の人間というのは、気がきいて相手の家までやるから、それは京都の人間にとって、非常にプライバシーを侵されたという…。

東郷 その六分の、そのことなのかな。

奥田 真ん中から一分だけ、それが京都の隣近所の…。

東郷 六分のという言葉はともかく、道路の半分よりちょっと向こうまではこっちの責任。そうか、うちの母方が京都だから（笑い）。子供の時にそれが頭に入り込んで、この年になってまだそういう感じなんです。

奥田 私がなぜそういうことを言ったかと言うと、また奥田は同じことばかり言うと言うけど、それぞれ背景が違った外国人居住のあれも、何でうまくいくかと言うと、その六分のロジックですよ。決して相手の世界まで入らない。といって無関心でもないという六分のロジックが都市共生の…。

谷 アメリカの郊外に住んだ日本人が、隣の人に「お宅の芝は伸びていますから刈ってあげましょうか」と言われると言うんですよ。最初は親切で言ってくれていると思ったら、そうじゃなくて、早く刈れと言っているんだそうですね（笑い）。そういう付き合いのやり方というのは、色々あるんでしょうね。

でも、そういう知恵というのは、今後また、逆に言うと、19 世紀までは遡らないのかも知れませんが、戦前の知恵をもう一回戻すということなんですかね。

東郷 だから、それはむしろ文明社会から自然回帰という、トータルで言うとそういう議論。

谷 日本が特に不幸だったのは、戦争に負けた途端に、戦前のことは全部ひっくり返して否定しちゃったでしょう。あれがそもそもの大間違いだと思うんですね。だけど、なかなか今の韓国の関係なんかを見ても、ちょっと違うことを言うと、周りから叩かれる環境にまだありますよね。

恒松 戦後の三大改革と言われた財閥解体、農地解放、内務省解体というやつね。あの三大改革というのが今の日本を悪くしているような感じがしてしょうがないです。地主がなくなっちゃったことによって、今まで地主がやっていたことをみんな農林省がやるようになっていきますよ。だから駄目になったんですよ。

財閥解体で財閥がいなくなったために、今の銀行の破綻なんていうのは、本当を言えば、三井だとか安田とかというのは、全部自分達で背負って始末をつけたはずなんです。それを全然今の頭取なんて何にもしないわけでしょう。やたらと退職金だけ踏んだくって。私が小学校の時に昭和恐慌だったんですけど、あの時に銀行が全部破綻したんですよ。地方銀行も随分破綻しました。毎日のように資産家の家の財産の

売り立てと言いますか、競売をやっていたのを子供心に覚えているんですね。

だから、そここのところの地主の果たしていた公共的な役割というのは、殆どみんな駄目になっちゃったということですよ。農林省に任せちゃったから、余計悪かったのかも知れない、そんな感じがするんですけどね。それは都市政策とは問題がちょっと違うんですけども、何か非常にアメリカの合理主義と言うか、ある意味ではデモクラシーの基本ではあるのかも知れませんが、それが今までの体制を引っ繰り返したということは事実だと思いますね。

谷 時間になってしまったので、もう一つ国際化の話も本当はしたかったんですけど、ちょっと今日は時間がありません。次回にまた、今の国際化の流れ、グローバリゼーションというのが、アメリカ中心で、どちらかと言うと、アメリカナイゼーションに近いような形で起こっていて、それが今度の問題の根底にもあるのではないかという気がしていますし、それまでブッシュは国連軽視、京都議定書も拒否で来たのが、急にテロが起こった途端に方向を転換するという、御都合主義だなと思ったんですけども、そういう話と、もう一つは奥田先生が研究されているような、人がどんどんグローバルに動いていった時に、そういう人に対してどうしても不安を感じている一般の国民はたくさんいるわけですね。そういう不安をどういうふうに解いていくのか、あるいは逆に、そういう問題を起こさないために、どういうふうに都市をつくっていったらいいかというのが、かなり大きな問題だと思いますね。

恒松 国際化問題は大きいですね。

谷 それを、こんなテロが起こるから、国際郵便はスクリーニングするとか、そういうことをすると、また昔に逆戻りですから、それはできないと思いますのでね。

恒松 大変難しい問題が一杯ありますけど、谷さん、よろしく。

谷 また宜しくお願い致します。

恒松 谷さんにばかり頼んで、何にもこっちはしないからあれですけども、宜しく申し上げます。